
雑話集

麻倉龍之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雑話集

【コード】

N9941Y

【作者名】

麻倉龍之介

【あらすじ】

心の赴くままショートショートを描いていこうと思います。

水面に映る望みのもの

「して、その願いに命を懸けられるか。」
そう水妖は訊いた。

すると男は「無論。やると決めたこともできないようならば、この命続くだけ無駄なもの。」
と迷いのない決意を述べた。

「ならいい。」水妖は肯定も否定もない表情を浮かべ、ただ男を見守っていた。

草木も眠る丑三つ時。もはや川には、水妖と男の外、闇しかこの場に存在しない。

そして、男はその満月映える静かな水面に足を入れ、

水妖に言われた通り水に濡れた両の手を、三度強く打ち鳴らした。

- - - - -

蛍が飛び交うことで有名な伊加根川の下流で、満月の夜にあるホムレスの水死体が見つかった。

遺体には争った跡も無く、川辺に遺書らしきものが置いてあったので、警察も事件性は無く、自殺の可能性が高いと発表した。

また、町の人も普段その男があたりを徘徊する姿を知っているたので、

「嗚呼、お金に困っていたんだろう可哀想に。」とか、
「雇用問題をないがしろにしているから、こういう犠牲者が出るんだ。」

といったお決まりの意見がテレビで放送された。

中には、「お店であいつが近く通るとスゲー臭かったんだよね。」といった意見が取り上げられることがあったのも事実だ。

はつきり言ってさほど大きく取り上げられることは無かった。

せいぜい雇用問題とか福祉問題を論じるネタとして扱われるくらいが関の山だった。

筈だ。

ただどう納得しようとも、落ち着かないことがある。

男の死顔には水死体とは思えない

達成感にあふれたような表情が浮かんでいたのである。

ありえない。

少なくとも今時分、冬の寒さに誰もが身を縮こめるというのに
あるうことかうつすらと氷さえ浮かぶ川の中で、

あたたかも温泉にでもつかっているような

満足げな表情を浮かべる筈がない。

- - - - -

妖怪にはいろいろなやつがいる。

怒りっぽいやつもいれば、わりと冷めたやつもいる。

人好きのするやつもいれば、人喰いのやつもいる。

大食いのやつもいれば、食の細いやつもいる。

美女もいれば、身の毛のよだつ姿のもいる。

適当なやつもいれば、律儀なやつもいる。

よかつたな人間。

命は頂く。ただし約束については、名誉に懸けて叶えてやった。

夢のある人間は好きだ。

命を惜しい者とも思わず、我が元へと列を成す。

その散るときに残す輝きは、時を経てなお人を魅了するという。

夢のない人間は嫌いだ。

命ばかり引き延ばし、気がつけば命の絶えた者ばかりだ。

その散ったあとに残るのは、我も喰わぬ骨のみと聞く。

非常用ボタン

目の前に非常用のボタンがある。
それを押すか押さないかで自分は今、迷っている。

押さずにいれば、今と一切変わることはない
平穏な毎日を迎えることができるのだろう。
しかし、押せばたちまち異常を呼び込むけたたましい音が鳴り響き、
自分は押したことによりもう今の自分には戻れなくなるだろう。

平凡な灰色の壁にただ一つ異物のように取り付けられているその赤
い赤いボタンは、
造作もない一押しでたちどころに「非日常」を呼び起こす、甘く刺
激的な欲を駆り立てる。

いや、むしろ眺めているだけで
もう既に、自分が人とは違う
非日常に身を置いているような気分さえさせてくれる。

「人とは違う。」なんと魅力的な言葉なのだろう。

長らく自分は特別であると信じてきた。
家族や友達、身の回りのほとんどの人が
歴史にかすり傷一つ残すことができないことを
ほとんど絶対的なまでに知りながらも、

自分にだけは何かしら「人とは違う」

特別な運命が待ち受けていると信じてきた。

もはや、特別である。そう信じるからこそが、自分の存在意義と同義ではないかとさえ思う。

自分にしかできないこと。それが無いなどということになれば、

自分は自分である必要はなくなり

自分が抜けたところで、必要があれば他の人でその場所を埋めることができる。

それで世のなかは一向に困ることはない。

ひんやりとした赤いものに触れ、

愛しむようになでてみると不思議な自身が沸いてきた。

これを押せば、先の見えなかった暗い道は、音を立てて崩れ落ち、光に照らされた自分にしか進めない特別な道が拓けるかもしれない。凡庸な周りの人々と決別し世界と歴史に必要とされる

「人とは違う」存在として、歩みを進めることが出来るかもしれない。

なでた手で、ボタンのあるあたりを触れてみると、

気持ちの上ではもうほとんど押したも同然であった。

なんとという心地の良い感覚だろう。

自分は一切危うい身に成らずして、特別であることができる。

すると、奇妙な充足感が満ちてきてた。

不思議なものである。

先ほどまで、あれほどの興奮を掻き立てていた非常用ボタンを見て、押してしまう人の行く末、その不安定さを想い、刺激、非日常に憧れを残しながらも、それを押すことは馬鹿を踏むのと同じであるという風に感じてしまっていた。

「わざわざ我が身を危うくするようなことをしなくてもいいじゃないか」

そんな心持ちが自分を説得し、微笑してしまった。

とたん、おなががすいていることに気がつき、
「よし、今夜はカレーにしよう」と決めると
そのひんやりと冷たいところから手を離し、
材料を買いそろえるために、温かい光の点る駅のスーパーへと歩き
始めた。

非常用ボタン（後書き）

自分はボタンを押す側の人間でありたいです。

G o N o r t h ! !

北に行かなければならない。自分は今、追われている。

ことの始まりについてはよく覚えていない。
人は大事なことは忘れないというから、
さほど大事なことはなかったのかもしれない。

冬が近づき、外出にはコートが必要な気温になったころ、
ただひたすら北へと向けて走り出していた。
もしかしたら、もっと前からだったかもしれない。
物心ついたころには、もう走り出していたのではないかと
訊かれれば、もしかするとその通りだったかもしれない。

いつからなのかはやはり、わからない。
確実なのは、今もこうして走っていることである。

寒い。

本当に寒い。

もう一枚寒さから身を守る上着を羽織りたいところだが、

あいにく自分には今着ているジャンパーの他、一切の持ち物が無い。

ついこの前までは良かった。

その時は車があつて、車内に暖房こそなかったものの、少なくとも雪や、風にさらされることはなく、綿毛の雪が降り込む中ただアクセルを踏み、ハンドルを握れば走り続けることが出来た。走るための道があつて、その道を走っていれば北に向かうことが出来た。

しかし先日、急に道はフェンスに四角く囲まれた公園のようところに自分を導き、

車に乗ったままではその先に進むことが出来なくなつてしまった。

それだけではない、公園のようなところに入ったとたん、今まで乗つてきた車は急に

みぞおちを殴られてうずくまる人のように崩れ落ち、

どんなにアクセルを踏んでも音一つたたず、二度と乗ることの出来ない、ただの車輪がついた”モノ”になつてしまった。

これでは、フェンスに突っ込んで無理矢理突破することもできない。

だからといって、立ち止まることは出来ない。自分はまだ、追われている。

ドアを蹴破るようにして開け、車の外に出た。

もうドアを閉めることなぞ忘れて無我夢中にも走り出す。

風にさらされ、息も白い。耳が寒くてちぎれてしまひそうだった。

外に出たのは久しぶりだ、などと思う暇もない。生きるか死ぬかが、

かかっているのだ。

うっすらと雪の積もった地面を蹴り、フェンスの方へと走り出す。

フェンスの先は暗くて見えない。

木々が鬱蒼としたように生えていた。

そのときこの先はもっとつらいこつとがあるような気がしたものだ。フェンスをよじ登り、森のある先へと進もうとする。

北はこちらの方角だ。

指に食い込む鉄が冷たい。

森に入ると道は無かった。ただただ木々があるだけで、空も鳥も見なかった。

しかし歩くことは許されず、ただただひたすら走ってた。

枝に殴られ、枯れ木につまづき、血が流れてさえ止まれない。

まっすぐ走っていると信じていたが、実際どうだかわからない。それでもこっちが北だと信じてる。

走らなくて。自分はまだ追われている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9941y/>

雑話集

2011年12月11日12時52分発行